

イギリスにおける

化學工業トラストの成立

——I・C・Iの概観——

神野璋一郎

(一)

第一次世界大戦は、それまでほとんど世に知られていないしかも未開發の工業と、それに必要な諸原料のもつ價值がいかに大きいものであるかということをきわめて具體的に明らかにした。そして、これらは今日および將來の資本主義のあらゆる事象と、一切の希望を左右する程のものであることを實證するに至つた。こうした未開發の諸工業とは何かといえ、第一次大戦後に急速に發展をとげてきた新興工業の諸部門、ことに、化學藥品、錫、ゴム、石油、アルミニウム、ニッケルに依存する化學工業ならびに非鐵金屬工業の各部門であるといえよう。諸化學工業および非鐵金屬をその掌中に収めるものは、將來の世界の工業界の支配權を得ることができるとさえいわれた。これは平時においても、戦時においてもあてはまる。曾ては、世界權力の基礎とさえいわれ、古い傳統のある霸權をもつた鐵、鋼、石炭さえも、上述のものに挑戦して殆んど勝算のないものと見られる程である。

仮りに、今日の戦争の場合について考えてみよう。第一次大戦までは、世界は戦争の武器を鐵鋼業及び化學工業中

の火藥工業部門だけに求めていた。しかしその後の世界は、戦時における軍需品を準備するためにこれを化學工業の全分野に求めなければならない程になつた。

第一次大戦後、急速な發展をとげてきたこうした新興工業を支配する資本は、資本主義世界の産業の中に巨大な地位をしめるようになったことは明らかである。たとえばアメリカのデュポン、ドイツのイー・ゲーの如く。以下においてその成立と、初期の發展を概観しようとするイギリスの I・C・I (Imperial Chemical Industry Co., Ltd. — 帝國化學工業會社) もまたこの例にもれるものではない。そして、I・C・I の成立はイギリス化學工業における巨大トラストの誕生をしめすものであると同時に、國際的な化學工業大トラストの成立をしめすものである。

I・C・I は成立の當初から新興工業の全部門において、さらに又、新工業資源の殆んどあらゆる領域にわたつてその巨大な姿をあらわしてきている。ある時はその巨大な姿は、他の資本主義的コンツェルンを壓倒するかの如く、又、ある時にはヨーロッパ、アメリカ、アジアその他の領域において巨大な他の諸獨占組織と結んでおり、數多くの企業の株主名簿の中では主要な要素となつてあらわれている。そして、I・C・I は『平時において有利な産業を支配すると同時に、戦時においても有利な産業を支配するものである』ことをその後の發展の歴史において如實にしめしている。I・C・I はその成立の當初からきわめて巨大な組織であると同時に、きわめて廣汎な分野で活動した。したがつて、『I・C・I とは』と問われた場合に明確に答えることは困難である。しかも、イギリスの労働者はその本来の内容についてはきわめて簡明に答えることができるのである。かれらは、イギリスの化學工業は一九二六年以後は、この七七百萬ポンド(一九三〇年現在における資本金^{註一})という巨大な結合體の下に結びつけられるに至つた事をはつきりと記憶している。さらに又、かれらはずきの事實をも知り盡している。つまり、この結合體の組織者

たるメルチェット卿(Lord Melchett—ハロー一般的には、ハルトフレッツ・モンド卿—Sir Alfred Mond—として知られる)は、
どに工業におけるいわゆる合理化(資本家的)を一般化させ、モンド・ターナー會議を通じて『産業平和』の理論を一
般化させた人は未だ會てないということだ。

(註一) Hise Siemann "Internationaler Vergleich der Finanzierungspolitik der Großindustrie" 1934, Verlags-Anstalt
Heinr. & J. Lechte, S. 50. 創立當初の資本金は五四五百萬ポンドである。

(註二) モンド・ターナー會議(Mond-Turner Conference)は、I・C・Iの指導者アルフレッド・モンド以下の有力な廿四
名の資本家が提唱し、これにたいし、労働組合會議總務委員會はこの提案を承諾し、會長メン・ターナー以下二十九名が参加
した、一九二八年一月十二日ロンドンのロイヤル・ンサイエティで第一回の會合が行われ、同年七月四日第二回の會合におい
て、勞資協調による産業組織の改善についての双方の意見が一致した。

(11)

ここでI・C・Iの成立當初の事情について簡単に概説してみよう。

I・C・Iは一九二六年十月に、當時イギリスに存在した四大會社、即ちブラナー・モンド會社(Brunner Mond
& Co. Ltd.)、イギリス染料會社(British Dyestuffs Company, Ltd.)、ノーベル工業會社(Nobel Industries, Ltd.)な
びに合同アルカリ會社(United Alkali Company, Ltd.)を合同しブラナー・モンド會社の支配者アルフレッド・モン
ドを指導者として設立されたものである。このI・C・Iが設立された一九二六年といえば、同年五月にイギリス炭
礦業を中心とした大ゼネ・ストがおこなわれ、二五〇萬の労働者がこれに参加した。しかも同年十一月にこのストラ

イキは労働者側の敗北に終つたというイギリス労働運動史上において記憶されるべき年であつた。その同じ年に、イギリス化學工業界の指導的地位にあつたモンド卿は生涯における絶頂時に立つていたのである。

一九二六年は、イギリスにとつて労働運動史上特筆されるべき年であつただけではなく、第一次大戦後のイギリス資本主義の發展の中でも、多くの經濟指標がしめすように最悪の年であつたとみることが出来る。戦後衰退の途をたどつていたイギリス資本主義(従來の産業上の諸缺陷、新興競争國の出現、輸出産業の不振等による)は、一九二五年に舊平價による金本位への復歸をおこなつたが、これによるデフレーションはさらに状態を悪化させた。高いポンド相場を維持は、イギリス産業の競争力を弱め、その輸出をさらに困難にさせ、イギリスの地位を弱めることになつた。こうした時期に世界最大の化學工業トラストの一であるI・C・Iが生れたのである。

I・C・Iを誕生せしめた直接の動機はといえば、その誕生の前年つまり一九二五年に成立したドイツの化學工業トラスト、イー・ゲーに對抗して、イギリスの化學工業の競争力を増大せしめるためであつたといわれている。アルフレッド・モンド卿は、I・C・Iの誕生は、『ドイツの化學工業トラストによる世界征覇にたいする返答である』と語つてゐる。しかし、モンドはこれと同時に、アメリカとの競争に對抗することもこのトラストを成立せしめるに至つた目的であると述べてゐる。^(註)

(註) Ludwell Denny 'America conquers Britain' Alfred A Knopf, New York, 1930 p. 328.

ここで當時の主要諸國の化學工業と、世界市場における地位の變化を一言しておこう。第一次世界大戦の過程で、従來世界の化學工業界において支配的地位にあつたドイツがその地位を失うに至つた。戦争の終末頃には、アメリカが化學工業製品については最大の輸出國となつた。ドイツと共に、フランス、イギリス、ベルギーも世界市場におけ

る従來の地位を保持できなくなつた。しかし、大戦後におけるヨーロッパ、とくにドイツの工業再建は化學工業製品についての世界市場の状態に直接の影響をあたえることゝなつた。以下の表でみるように、一九二六年にはすでにアメリカはその首位をふたゝびドイツに譲り、ドイツの化學工業製品の輸出額はすでにアメリカを五〇%も凌駕してゐる状態であつた。

一九二六年における主要四カ國の化學工業製品の輸出額（單位＝百萬ドル）

| | |
|------|-----|
| ドイツ | 二五六 |
| アメリカ | 一七一 |
| フランス | 一二五 |
| イギリス | 一一四 |

(註) R. K. Michels, "Cartels, Combines and Trusts in Post-War Germany," Columbia University Press, 1928.

p. 153

化學工業製品の中でもことに染料では競争がはげしくなつた。戦時中、最大の生産國であつたドイツに代つて、戦後アメリカが抬頭した。(ドイツの化學工業界の關係筋は、アメリカの急速な發展はドイツの特許權を沒收した點に重要な原因があることを主張した)しかし、戦後、ドイツのカムバックは著るしく、ことに高級製品の分野では目立つてゐた。

化學工業界におけるこうした事情の中でイギリスの、とくに染料工業は大きな影響をうけることゝなつた。イギリスの染料會社は戦前から戦時中も外國人の支配力がかなり強く、しかも染料消費量の九〇%以上は主としてドイツか

ら輸入されていた。一九一八年に、政府の支援によつてイギリス染料會社が既存の會社を合併させることによつてつくられた。同社はイギリス染料生産については一應の獨占的地位をもつていた。又一九二〇年には染料輸入統制法—Dyesutis (Import Regulation) Act—が制定され、外國の競争から國內の染料生産者を保護しようとした。そしてこのために特別の許可ある場合を除いては、染料の輸入を禁止した。しかし、イギリスの生産者から得られないものは特別の許可をうけて輸入されることとなつていた。したがつてこれらは外國の競争者がつける最低價格で輸入され、それが統制法の目的とする効果を大いに減殺したことは明らかである。その上、イギリス染料會社の地位も完全な獨占會社ということはできなかつた。こうしてイギリスの染料工業界は戦後においても十分に確立されることはなく、最大生産會社であるイギリス染料會社は經濟情勢の悪化と、内外の競争によつてその地位は悪化した。(イギリスでは、その規模は小さいとはいえ、獨立生産會社は二〇社以上存在し、これがイギリス染料會社にとつて積極的な競争者の立場に立つた) イギリス染料工業のこうした事情に着目してこれに乗じようとしたのが一九二五年に成立したドイツの染料工業トラスト、イー・ゲーである。實さいに、イギリス染料會社はドイツの染料トラストとの間に實効力のある協定を結ぼうと數回にわたつてその試みを行つてゐる。しかし、イー・ゲーはこの場合に技術的援助を與える代償として、利潤の分配に参加することを提案した。これによつてイギリス染料工業にも支配の手を延ばそうとしたのである。イギリス政府はこの提案を受諾することは拒絶した。^(註)

(註) Patrick Fitzgerald, "Industrial Combination in England", 1927. London. p. 89—91. Alfred Plummer "International Combines in Modern Industry", London 1938. p. 145—146.

染料工業におけるこうした事情にもつとも注意していたのは、當時のイギリス化学工業において重要な地位をしめるプラナー・モンド會社(基礎化學部門であるソーダ工業を支配)社長のアルフレッド・モンドであつた。かれは、他方でも、さききのべたイギリス染料或社の重役も兼ねていたのである。當時のイギリスの化學工業部門を見ると、重要な三部門、つまりソーダ工業はプラナー・モンド會社及び合同アルカリによつて、火藥工業はノーベル工業會社によつて、また、染料工業はイギリス染料會社によつていづれも獨占體の支配力の下におかれていた。この中、前二者については、より以上の合併は必要とされなかつた。たゞ染料工業だけは小規模の競争會社が存在し、より以上の合併が必要と考えられた。また傳えられるイギリス政府の意向としても、國內の化學工業をイギリス工業力の基礎とし、戰爭準備の基礎とする點にあつた。そして、大規模染料工業の確立の必要なこと、さらに技術上の連關性という觀點から、染料工業と火藥工業の關係が重視された。モンドはこれらの上述の諸事情を考慮した上で、上記の四大企業を一丸とした化學工業における綜合大トラストを形成することゝなつた。それぞれに異つた諸企業が相互に有機的に關連せしめられ、しかもこうして組織された巨大獨占體の中には、その中に統合されたそれぞれの巨大企業の支配下にあつた異種の産業部門を擔當する諸企業も多數包含されることゝなつた。I・C・Iはこうした點において化學工業における大コンピナートの觀を呈しているものといふことができる。

アルフレッド・モンド卿は新會社I・C・I(既述)を創立し、さききのべた四大企業を買收して吸収することにした。そして、買收される各會社の株式資本の購入價格は額面額にして五六、八〇三、〇〇〇ポンドの新會社の株式を割當てることによつて辨濟されたのである。I・C・Iに吸収された當時、プラナー・モンド會社は最大で株式資本額一五百萬ポンド、これについて、ノーベル工業會社は株式資本額は一六百萬ポンド、第三位は合同アルカリ會社で

株式資本額は三・七百萬ポンド、そして第四位のイギリス染料會社は株式資本額は四・七百萬ポンドであつた。こうして新たに成立したI・C・Iは創立當初すでに四〇〇の子會社(關係會社をのぞく)を有し當初の株式資本金は五四、五一四、七三二ポンド(これは額面一ポンドの累積的優先株一配當七%一五、四七〇、六四七株、額面一ポンド、七%配當附一非後配普通株二九、九一五・九七一株、しかも、殘餘利潤の三分の二にたいしては請求權あり一普通株二九、九一五、九七一株、ならびに、額面十シリリングの後配株一八、二五六、二二八株より成る)であつた。^(註)

(註) こゝにかゝげた數字は *Hise Siemann* の前掲書四七—八頁による。なお同書によれば、この會社の資本金は一九三〇會計年度までに四回増加せしめられてゐる。すなわち、一九二七會計年度には三、六五五、一一七ポンドが、一九二八會計年度には七、五七五、八一二ポンドが、一九二九會計年度には一〇、七三六、〇九九ポンドが、そして一九三〇會計年度には一九〇、〇七〇ポンドがそれぞれ増加せしめられてゐる。この結果、一九三〇會計年度の株式資本總額は七六、六七一、八三〇ポンドとなつた。

子會社數といふ、また創立當初の資本金額の點からみて、同社はイギリスでこの時までに登録された合同の中で最大のものであつたといふことができるのである。

I・C・Iは買収によつて四大企業およびその子會社を吸収したが、新會社(I・C・I)は、それを構成する諸企業(その子會社も含む)について細かい經營上の點はそのまゝにしておき、したがつてこれらの諸企業は以前と同じ重役の下におかれていた。たゞこれらの諸企業の政策ならびに金融上の監督權は新會社の手に移り、新會社の重役會はそれらの企業の重役中から選出された十二人のメンバーを以て構成されて^(註)いた。

(註) *Perrick Fitzgerald, "Industrial Combination in England", p. 99.*

この合同が前にのべたようにイギリスでこれまで行われた最大のものであるという以上にその大きな特長——この點は他といちじるしく異つてゐる——は、それが大部分は競争相手の全くない、つまり各分野において大體支配的な諸企業の間における合同であつたという點である。この合同によつて得る利益は何かという質問に答えて、アルフレッド・モンドはつぎのように誇らしげに答えている。第一に、技術的に又經濟的に、双方の面においてより大きな實効力をもつに至つたことであり、第二に、他國の同じような大規模のグループと平等の條件にもとづいて交渉する力を得たことであると。

イギリスの製造工業の領域において最頂點に立つ I・C・I はイギリスの金融機關、ことにイギリスの銀行業と決して獨立してゐるものでないことに注意しなければならない。一般にイギリスにおける産業資本と銀行資本との關係は、ヨーロッパ大陸におけるそれ——とくに典型的にはドイツに見られる關係——とやゝ異つた姿をもつて發展してきてゐることはあらめたる説明するまでもない。しかし I・C・I の歴史は、イギリスにおいて産業資本と銀行資本とを非常に密接に結びつけてゐる代表的な重要な組織の一であるといふことができる。I・C・I の中心機構にある同社の重役の構成をみると、この銀行資本と産業資本とのすばらしい協調が立派に證明されている。その簡単な一例を挙げると、今日イギリスにおける全銀行體系を牛耳つてゐるともいわれる『五大銀行』の中の四行は重役を通じて I・C・I と關係してゐるのである。そしてこうしたイギリスにおける巨大銀行を代表してゐる重役達はこのイギリス最大の製造工業會社の支配的地位にある。

そして I・C・I は今日の独占資本主義の典型的特質をそなえてゐるといふことができる。それは I・C・I の株主名簿が明白にこれを物語つてゐる。つまり、株式が極度に株主の間に分散してゐるという事實である。(株主總數一二

萬五千人という事實をみよ！)そしてI・C・Iの株主名簿は全く資本家階級の富の横断面をしめすものというべきである。

(三)

I・C・Iはイギリスにおける化學工業の重要部門における四大企業とその子會社を中核として創立されたものであるが、これらの四大企業は化學工業の分野にとらまらず、きわめて廣汎な分野にわたつて關係をもつていたため(後述)I・C・I自體は本來はイギリスの化學工業會社といわれているが、實さには化學工業上の製品を超えて種々の部門におよんでゐる。こゝで参考のために、右ぎのへたI・C・Iの中核となつた四大會社が支配し、又は、四大會社によつて吸收された諸會社をあげてみる(註)の通りである。

(1) プラナー・ギンド會社

Castner Kellner Alkali Co.; Electro-Bleach and By-Product; Chance & Hunt Synthetic Ammonia and Nitrates;
Buxton Lime Firms Co.

(2) 合同アルカリ會社

Henry Baxter; Globe Alkali Co.; Greenbank Alkali Works Co.; A. G. Kurtz & Co; James McBryde & Co; St
Helen's Chemical Co.; Sutton Lodge Chemical Co.; Thomas Walker; Atlas Chemical Co; Gaskell, Deacon & Co.;
Golding, Davis & Co; Hall Bros & Shaw; Hay Gordon & Co.; John Hutchinson & Co.; Liver Alkali Co.; Niel
Mathieson & Co.; Mort, Liddell & Co; Muspratt Bros & Huntley; James Muspratt & Sons; W. Pilkington & Son;

Runcom Soap & Alkali Co.; Thos Snape; Sullivan & Co.; Widnes Alkali Co.; Wigg Bros & Steele; Netham Chemical Co.; Hazelhurst & Sons; Heworth Alkali Co.; Garrow Chemical Co; Newcastle Chemical Works Co.; J. G. and W. H. Richardson; Seaham Chemical Works Co.; St Bede Chemical Co.; Charles Tennant and Partners Wallsend Chemical Co.; Eglington Chemical Co.; Irvine Chemical Co.; North British Chemical Co.; Charles Tennant & Co. of St. Rollox; Boyd, Son & Co; Newcastle Chemical Works; Charles Tennant & Partners; 大分県大分市の商會社のトナリ社記

E. Branwell & Son; Morgan Moorey; Dublin & Wicklow Manure Co.; Peter Alfred Mawdsley, Flint; Tyreside Chemical Co.

(3) イギリス染料會社

British Dye; LeVinstein; Scottish Dyes.

(4) ノーベル工業會社

Amac; Bickford, Smith & Co.; British Pluvisin Co.; British South African Explosives Co.; British Westfalite; Wm. Brunton & Co.; Continuous Reaction Co.; Frederick Crane & Co; Curtis's & Harvey; Eley Bros; Elterwater Gunpowder Co.; Excelsior Motor Radiator Co; King's Norton Metal Co.; Kynoch; Lighting Trades; John Marston; New Pegamoid Nobel's Explosives Co.; Patent Electric Shot Firing Co.; Roburite and Ammonal Sedgwick Gunpowder Co.; W. H. Wakefield & Co. (註) Patrick Fitzgerald. Ibid p. 222—224 Appendix

右のべたI.C.C.Iの中心を形成する四大會社の中で、このトナリ・キング會社およびノーベル工業會社は、

前者は化學工業における基礎的生産物としてのアルカリの独占的生産者として、又、後者は國際火藥トラストの主役者としてともにI・C・Iの支柱をなしているものと見る事ができる。しかも、これら兩社の發展はそのまゝI・C・Iの廣汎な活動と關連が深いのである。以下、しばらくこれら兩會社の沿革を略述してみることにしよう。

プラナー・モンドの歴史はイギリスのアルカリ工業における企業集中の發展をあらわすにもつともふさわしいものである。そしてプラナー・モンドの發展の歴史は當然その中で、合同アルカリ工業會社の發展とも關連してくるのである。プラナー・モンドはベルギーのソルヴェイ及びアメリカのデューボンとも密接な關係を有し、これはイギリスの化學工業擔當者と、外國との密接な關係をしめす一の具體的な例をしめしている。プラナー・モンドは、一三〇エーカーの土地を買収し、五千ポンドの資本金を以てアンモニア・ソーダの製造に従事したのは一八七三年であつた。この事業が成功を収めたので一八八一年には資本金は六〇萬ポンドに増加せしめられている。そしてこの年はじめて株式會社に組織の變更を行つた。一八八一年はアルカリ工業の製造過程に大きな變革がおこなわれた年である。従來はルブラン法の下でおこなわれていたが、既に一八七〇年代の後半には過剰生産があらわれていた。こうした中で、一八八一年にアムモニア・ソーダ法が新たに採用され、(プラナー・モンドの創立者による)これにおいてはルブラン法を採用する諸會社はもはや利潤を擧げてソーダの生産をつゞけることは不可能となつた。従來の生産方法の下における過剰生産の傾向と、有利な新生産方法の採用はこの企業における独占えの方向に拍車をあたえたことはいふまでもない。もつとも新たに採用されたアンモニア・ソーダ法はアルカリ生産のみに用いられるだけであつたため、舊製法による副産物である鹽素系生産物には影響がなかつた。ソーダ事業における損失を相殺するためには、副産物における独占組織を結成することが唯一の途であると考えられた。こうした目的から“Bleaching Powder Association”と云うカル

テルがつくられた。こゝでは生産及び價格の統制がおこなわれた。(期間一八九〇年まで)こうした中であつてプラナー・モンドは一そう事業を擴張し、一八八四年には資本金を一五〇萬ポンドに増加した。一八九〇年に、さきのカルテル(Bleaching Powder Association)に加入していた各業者はより安定した組織を形成することが必要であることを感じ、合同を決議した。これに包含されたのは大體五一社であるといわれている。合同アルカリ工業はこの一八九〇年に出来上つたのである。

プラナー・モンドはこの間に、他方でニッケルの研究をおこないモンド・ニッケルを創立している。

さきにつくられた五一社による新しい獨占組織は、ソーダ及び鹽化生産物の双方が同時に生産される新生産方法が発見されてから(これがもつとも成功していたのは後にプラナー・モンドに吸収された Casner-Kellner である)數年の中に崩壊しそうに見えた。この新しい獨占組織の存亡をかけたたゞかいは、一方でルブラン法を廢棄しながら、遂に新しい生産方法に轉換するまで、大體一九一六年までつゞけられた。

一方、プラナー・モンドの勢力と富が發展してきた結果、この方でもアルカリ生産者の吸収が始まつている。プラナー・モンドはアンモニア・ソーダ法の改善をつゞけた。プラナー・モンドのアルカリ製造業者吸収のための努力は(一)さきの獨占組織の漸次的再編と、(二)Casner-Kellner; Electro-Bleach、およびその他の業者がこの分野におけるいかなる獨占體の出現をも防止しようとした結果、急速には進捗しなかつたと見られる。第一次世界大戦までは大體こうした状態であつた。プラナー・モンドはこの間に内部的な發展に専念したが、やがて、戦後には大膽な他企業への吸収政策をとり始め、多數の企業をその手中におさめるに至つた。この中でも、とくに Casner-Kellner (苛性ソーダ、ソーダ及び鹽素合成物生産) Electro-Bleach and By-Products (漂白粉生産) Chance & Hunt (アンモニア合成物、酸類、

苛性ソーダ、硫化ソーダ、鹽生産)の全資本(約七八〇萬ポンド)を一九二一年に入手していることは注目すべきである。

さらに、一九一一年には、Gosage および Crossfield にある石鹼會社を手に入れ、當時、斯界において支配力をもつていた“Lever Bros”の有力な對立者となつた。(一九二一三年の間には、双方間にプール協成成立)第一次大戰中に、三十社以上の石鹼會社が入手され、石鹼業における支配力はむしろプラナー・モンドの手に握られるに至つた。一九二〇年にはこれらの石鹼業におけるプラナー・モンドの利権は“Lever Bros”に賣却されたがこの取引によつて二百萬ポンドの利益を得たとしわれている。しかも、この取引と前後して“Lever Bros”との間に締結した協定(一九一九年十月、一九二五年に更新)は、“Lever Bros”およびその關係會社へのソーダ灰の獨占的供給權をプラナー・モンドに與えることとなつた。(この場合に、關係會社の分配する利潤の五〇%以上がアウトサイダーの手に入るものと及び若干の海外にある關係會社は除外されている)この協定の成立によつてプラナー・モンドは石鹼事業から手を引く事となつたが、斯業にたいするソーダ灰の獨占的供給權を得ることによつてこれにたいする支配力は殆んど減少しないことが分るのである。

以上の外に、プラナー・モンドは人造肥料製造にも手を延ばし、一九二〇年には新會社を設立し、ドイツで採用された空中窒素固定法を採用した。(これは合成アンモニア生産に當るものであるが、戦時には、軍隊に豊富な火藥ならびにガスを提供することができる)

こうして、一九二六年にI・C・Iの設立された當時は、プラナー・モンドはアルカリ及び關係事業における不拔の地位をもち、高度の技術的合理化をおこなうとともに、戦争準備のために莫大な資産をもたらししている。

プラナー・モンドと並んでノーベル工業會社(それは全部とはいえないにしても、大部分は火藥生産に従事している)關係會社

を所有している。その事業部門は火薬を入れて六部門に及んでいるの歴史も又興味がある。とくにそれがもつ戦時における意義ならびに、國際的關連においてさうである。この後の點についてつぎのよりのべられていることは興味がある。『ダイナマイトの發明者アルフレッド・ノーベルは、かれの工場を世界のいたる處に、つまり、スエーデンから南アフリカに到る地域に、又、日本から南アメリカに到る地域においている。これらの分散している諸關係企業は、“Nobel Dynamite Trust Company”——それは、ドイツならびにイギリスの諸會社を結合させたものである。

——』“Société Centrale de Dynamite”——これは、フランス、スエーデン、イタリー、スペイン、および南アメリカにある諸會社を結合してゐる。——という二つの巨大トラストに集中せしめられてゐる。これら二つのトラストの重役會は主としてフランス人、イギリス人およびドイツ人から構成されているが、關係各國は、これらの重役中はその國の國民の一人を參加させてゐる。』と。

(註) Engelbrecht and Hanighen “Merchant of Death” 1934. p. 142. (邦譯『世界兵器工場物語』改造社)

ノーベル工業會社は、有名なダイナマイトの發明者アルフレッド・ノーベルによつて一八七一年に資本金二四萬ポンドを以て、爆藥物生産のため設立されたものである。(一八八六年に設立されたノーベル・ダイナマイト・トラストの中に含まれる) 元來、イギリスにおける火藥工業においては、第一次大戰前から獨占の傾向が顯著で、戦時中政府の承認の下にこの状態が維持された。^(註)(その主たる目的は、戦時目的達成のための生産能力の増強)この火藥工業において中心となつてゐたのはノーベル・ダイナマイト・トラストであつた。戦前には、ドイツならびにイギリスの生産者は、他の軍需品の場合におけると同様に、火藥生産の分野においても互に提携してすんでいたが、^(註)ノーベル・トラストはこの分野における協定においては外部にたいする代表者の地位に立つていたのである。

(註一) 第一次大戰の勃發當初においては事情はやゝ異つていた。戰爭勃發による事情の變化と、政府統制下における個々の會社の獨立的活動が行われた。しかし生産能力増強のためには、合同がのぞましいことが痛感され、早くも一九一六年には、爆薬生産會社の指導者達は合同の方向に一步をすすめた。

(註二) イギリスおよびドイツの生産者の間には利益をプールする協定が存在しており、これは大戰の勃發した一九一四年までつゞけていた。

戦前からの火薬工業における獨占的傾向は、一九一八年十一月の休戦直後においては、ほとんどすべての會社を何等かの形で包含していた。當時イギリスの一新聞はこれにたいして、その目的は、浪費を除くとともに、尨大な間接費を節約し、同時に能率の増進と、収益力の増加を確保するためであるとのべている。

第一次大戰の終了直後(一九一八年)に、ノーベル・ダイナマイト・トラストは政府の公認により、ノーベル工業會社として名義變更をおこない、再組織をしたが、この時同企業は、火薬、その他爆發物、さらにそれらの附屬品(フューズ等)軍需品等々の各部門において二十九の子會社を包含し『全く獨占的といわれるにふさわしい地位』を保有していた。^(註)戰爭終了後は、政府工場を除いては(これらは當時ほとんど重要性はなり)、重要な獨立企業はイギリスの國內には存在しなかつたとさえ見られる。しかも、ノーベルの獨占到對抗して、これに對立する會社が創設される可能性は殆んどなく、又、外國會社もイギリス國內に別會社を新設することも事業の性質上、政府の嚴重な監督があるため不可能に近かつた。

(註) 一九二一年にノーベル工業會社についておこなつた政府の調査によると、ノーベル工業はイギリスにおける火薬工業では獨占的地位を占め、七〇以上の爆薬その他の生産會社にたいして支配力をもつてゐるとのべている。『この國—イギリス—における全爆薬生産會社は比較的小規模の三會社をのぞいて、ノーベル工業會社の支配下に一のグループを形造つてゐる。イギ

リムの火薬工業には、The High Explosives Trade Association ; The Safety Explosives Trade Association ; The Electric Detonator Fuse Trade Association ; The Fog Signal Association. としつ四つの結合體がある。……』と同報 告書はのべ、さらには、國家の『間斷なき、しかも有效な監視』の下にノーベル獨占組織の活動がつかれるべきであることを勧告しつゝある。(A. Plummer, "International Combines in Modern Industry, p. 232-3)

戦後のノーベル工業は釘、パイプ、エンヂン等の廣汎な金屬工業をその支配網の中に引き入れ、さらにガス・マン
トル、模造皮、自動車部品、自轉車工業までもその中に引き入れている。

ノーベル工業が國內のみならず、海外においても、廣汎な活動を行つてゐることはさきにも述べた通りであるが、なお若干附加しておこう。全社は、アメリカ、カナダ、南アメリカでは、デネボン(アメリカ)と密接に關係し、一九二四年には、南アメリカで工業用火薬の生産をおこなうためこの地域における大規模な企業の間を合同を行おうとしてゐる。又、さきにも述べたように、ヨーロッパ内でも各國の火薬工業と密接な關係をつゞけようとしてゐるが、さらにそれ以上に重要な點は、舊バルカン諸國の軍隊とノーベルとを密接に結びつけることであつた。又、第一次大戦後にはドイツとの間の古い關係を再建しようと努力したが、その後イー・ゲーグループ内の企業と結びつてゐる。おそらくこれによつてヒットラー出現後において、ドイツで急速におこなわれた再軍備の結果として生じた莫大な利潤の分配をうけていたであろうことは充分に考えられることである。

(四)

I・C・Iの活動範圍についてみれば、I・C・Iはすでにのべたようにたんに化學工業部門だけではない。その

支配下にある各關係會社を通じて化學工業以外の多くの製品にかんしても支配している。銅およびニッケルの製鍊業電力にたいする必需品の供給、電機工業、強度鋼にもおよび軍需工業を支配しているといわれる。イギリスにおける自動車附屬品の最大製造業者にたいして大きな支配力をもつことができる。さらにイギリスの炭礦が生産する無煙炭の約四分の三を包含する巨大な結合體とも結んでゐる。一方、天然ガスマントル、合成皮革についてはイギリスにおける巨大な生産者であり、セルローズ、ペイント、エンジン冷却器、綿火藥、染料、自動車附屬品（ラジエーター等）肥料、染料、重化學製品、各種火藥、殺蟲劑、非鐵金屬、パラフィン等の分野にまで及んでゐる。そしてこれらの種々の製品はイギリス内のいたる處にある多數の工場で生産されてゐる。

I・C・Iは決して設立當初の規模では満足してゐなかつた。その希望する處は、あらゆる化學工場がI・C・Iによつて統制され、必要な原料はI・C・Iによつて利用され、あらゆる化學工業、非鐵金屬工業の副産物はI・C・Iによつてのみ利用されることを望んだ。そのためI・C・Iは創立直後から工場を買收し、編成替えをおこない、これを自己の組織の中に組入れることを忘れなかつた。こうして例えば、I・C・Iは人造肥料の生産を征服しようとしてスコットランドに進出を試みてゐる。要するにI・C・Iは英國においてもつとも進歩した、そして又、もつとも廣汎な分野に互る資本主義的企業組織であつたといふことができるのである。

I・C・Iはその創立の當初から活動範圍はきわめて廣汎な産業分野に及んでおり、しかもその後も依然としてその活動範圍を擴げているため、子會社との關係をさぐり出してゆくこと自體が一の迷路に入り込むようにさえみえる。子會社に子會社がつけ加えられ、さらにこれらの子會社がその下に附加される。一方、株式所有という一の結合帯が、これらの會社に密接に關連する多くの重役をむすびつけてゐる。その上、國際的諸關係——海外の獨占組織との資本

的結びつき、さらには又、價格、生産、配給等の諸協定を通じ——がさらに事情を複雑にしている。こゝではこうした關係についてきわめて簡単なスケッチをしてみよう。

I・C・Iの内部的な中央機構をみるときわめて簡單である。イギリスにおけるI・C・Iの主要な子會社は八つのグループに分けられている。その各々のグループはできるかぎり同一又は類似の商品を生産する會社から成つてゐる。これらのグループはアルカリ、一般化學藥品、石灰、爆發物、金屬、肥料および合成物にそれ々々分れてゐる。各グループともにそれ々々そのグループ擔當の業務執行の役員をもち、これは一般にそれ々々の専門家(技術者を含む)から成つてゐる。こうした各グループの執行役員中からえらび出されたメンバーがI・C・Iの本社に集まり、それによつて中央執行委員會が形成され、全結合體の活動についての共同的な連結の役割を果してゐる。

こうした子會社のグループ中で最大のものは、舊プラナー・モンド系の諸事業を代表するもので(資本金一、四二〇萬ポンド)、このアルカリ・グループ中にはI・C・Iの全結合體にたいするもつとも有力な原料生産を含んでゐる。

これは政府から期間九十九カ年の借地權を得(これの重役はイギリス政府により任命されてゐた)、英國領三四八平方哩開拓の權利をうけてゐる。この中には世界最大のソーダ貯藏地域を含んでゐる。爆發物關係のグループ(資本金五〇〇萬ポンド)の中に巨大な舊ノーベルの關係會社が含まれてゐる。これらの會社は全イギリスにわたつて擴がり、軍需品その他の工業生産物の會社を含んでゐる。この中で、爆發物工場はスコットランドの西部地域に集中してゐる。(これは當初は、大陸からの空中攻撃からかなり離れてゐるという考慮に基いたものとみられる)一九三三年には、舊ノーベルの生産する爆發物中の九〇%は工業用に用いられてゐたといわれるが、當時イギリスは勿論、世界の強國はいづれも恐慌のどん底にあり、そのためにこそ世界が平和であつたという客觀的事實がこれをもつとも立派に證明してゐる。(ある論

者は、この事實こそ首相のステートメントよりもつと立派に事實を證明するものであると皮肉つてゐる。

ニッケル以外の非鐵金屬は資本金五〇〇萬ポンドを有する別の金屬關係のグループに屬し、舊ノーベルの金屬關係事業に、さらに銅ならびに金屬使用の工場を附加した。この中心には飛行機附屬品、自轉車製造部門を含んでゐる。

人造肥料業は I・C・I において重要な地位をしめてゐる。こゝでも合理化と獨占の原則が適用されてゐる。肥料及び合成生産物のグループは世界における最大の人造肥料の生産者である。そしてこれは、將來の化學戰の目的のためには I・C・I にとつてきわめて重要であると最初から言われていた。I・C・I の組織の他の部分でみられると同様に、こゝでも、戰時化學工業の擔當者としての I・C・I と、その生産物の使用者としての政府との密接な關係は明白な姿をとつてあらわれている。この結び付きの余りに密接なことにたいして、『時には若干の恥しさを感じる場合がある』という酷評さえなされてゐる程である。一九二〇年に舊ノーベル會社が政府から巨大な戰時の生産設備を買収した。すべての戰時の經驗、ドイツの技術、ドイツの戰時の經驗にかんする知識、特許にたいする制約等の全部を合成アンモニアの生産に適用した。石灰はアルハムから、勞働者は莫大な數に上る失業者の中から得た。そして専門家は I・C・I の組織に結びつくことによつて容易に得ることができた。この場合にたゞ一つ缺けるものがあつたといわれた。それは低金利の資本であつた。政府はこれに關係する親切さは忘れなかつた。一九二五年に年五分の利子で二〇〇萬磅の社債を發行したが、その時、政府は年々の利子の保證をしたのみならず、全資本の償還についても保證した。普通ならば誰しも——仮りに首相であつても——イギリス政府は單なる肥料というような商品（しかも當時すでに世界はこの商品についで間もなく生産過剩に陥むにちがひなると言われていたが）の生産に従事する會社にたいして上の様な親切心をもつものとは考えなかつた。

ところが、こうした政府の保證を得て強固になり、原料ならびに副産物の處分をより完全ならしめるために、さらに地方の若干の工場の買収を試みている。政府との間のこうした結びつきを説明するのは、たゞ『つぎの戦争への準備』ということである。こう見ると問題はきわめて簡単に解答があたえられるのである。一方、肥料および合成物の補助會社として巨大な設備を設けた。しかし、この設備の目的は石炭から石油を得ようという點にあつた。この點についてやゝ長いつぎの説明をきいてみよう。

『この設備は一五〇萬ポンドを要費した。(これが)完成の曉には、それが數百萬トンの石炭を費して、年々一〇萬トンの燈油と若干のガソリンを製造することとなる筈である。これによつて千人の坑夫が職を得る見込である、というのが首腦者の話である。さらに、話は少々横道に入るが鋼鐵製の諸設備にたいする注文はヴィツカースの平和時における沈滞期を充分に乗り切らせるであろう。このためには又、イギリス政府は少くとも四年半の間は輸入ガソリン一ガロン八ペンスの現行税を確保し、又、自國産ガソリンにたいしては出來得れば十年の間一ガロンにつき少くとも四ペンスの獎勵金を下附しなければならぬ筈である。こうした事實は納税者から素敵な補助を與える赤裸々な證據である。年々、イギリスが輸入するところの三五〇萬トンのガソリンが一ガロンにつき三ペンスの費用を要するから、ノーベルへの獎勵金は毎年の豫算にたいして百萬ポンドの損失を與えることとなる。換言すれば、勞働者は年々この巨大な資本家的結合體に百萬ポンドを獻金しているのである。したがつて、このコンツェルンは原油生産の二倍半の費用で石油を製造することができる。それは金融的には結局は非常に無駄な費用を要するらしい立派な投機であり、政治的には軍需工業への大衆的獻金である……。そして事實はこうだ。この目的は、戦時における石油の製造および供給にあることは全く明らかである。又、イギリスの海軍および空軍にたいしてアメリカ

及びヴェネズエラからの供給を絶ち、あるいは、日本が蘭領東印度を攻略し、又は、歐洲の新興國が結合してルーマニアおよびアングロ・ベルシヤのタンカーが通過する地中海の航路をおびやかした場合に、燃料を供給することが目的だ。……』

これまでのべてきた處はI・C・Iのほんの内部事情の一端に過ぎない。しかし、これによつても今日の獨占資本のもつ特質というようなものゝ一端が多少は明白にされている。

I・C・Iの活動分野はすでにのべたようにイギリスの國境を越えて國際的に發展している。高度の技術と、多年の忍耐はI・C・I自身を國際的勢力たらしめた。規模の大小は別として、それは獨占資本のもつ全武器を有利な目的にむけてゐる。投資、協定、補助金等々、これらがつぎからつきえとI・C・Iの目的遂行に役立つたのである。

I・C・Iの國際的分野における活動をつぎのように一論者がのべてゐる。

『ユニオンジャック旗の下に、カナダ、南アフリカ、濠洲に黄金をつぎこんだ。又、アメリカでは星條旗の下で、新興産業部門における大なる分野——自動車、化學及び人造絹絲にたいして掌握の野心の魔手のばした。スペイン、アルゼンチン、ブラジルでは、今日、このI・C・Iが大兵器工場としての活動性をもつてゐることを知つた。世界中、いづれの國を訪れても、このI・C・Iが投資し、製品を販賣し、さもなければ何等かの開拓に従事しない國は一も見當らない。……カナダ、南アフリカ、東アフリカ、濠洲、ニュージランドではあらゆる産業の労働者を使用してゐる。……今日、この獨占體あるいはこの獨占體の一部分を形造る外國の生産組織が重大な利害關係をもつてゐる處はカナダ、濠洲、北米および南アフリカである。未だ、それは印度および中國では低賃銀労働の巨大な源を確保してゐなかつた。I・C・Iの幻影が極東における黄金の原野を震撼させるのはいつのことであらうか。』

……』云。

I・C・Iは數多くの子會社の外に、多數の關係會社においては、大株主となつてゐる。その代表的なものをあげると、オーストラリアI・C・I、ニュージランドI・C・I、アメリカのアライド・ケミカル、カナダ工業會社（こゝではデナボンもまた大株主である）、ゼネラル・モーターズ、I・G・染料、インターナショナル・ニッケル、アリカ火藥工業（こゝではI・C・IはDe Beers Consolidated Mines Ltd.と共同で支配してゐる）等がある。また、アルゼンチンにおけるI・C・Iの關係會社は一九三三—四年にデボンのそれと合同したといわれている。

I・C・Iの海外における活動中、ことに注目されるのはカナダおよびアメリカである。

カナダにおける關係會社はさきのべたCanadian Industries, Ltd.である。この會社は、カナダの化學工業およびこれと關係する他の事業については、同社の親會社が母國において有すると同様の地位をしめてゐるといわれている。そして、この會社の下にある十二の子會社は、あたかもI・C・Iの關係諸會社がイギリスをとりまくごとくに、カナダ自治領をとりまいてゐるといふべきである。太平洋岸から中西部平原を通つて太平洋岸に至るまで、約三千哩に及んでゐる。ケベック、オンタリオ、ブリテイッシュ・コロンビアにおいてはこの組織はニッケルおよび金鑛開發のため、さらに又、極東における兵器市場のため火藥を生産してゐる。オンタリオその他においては、染料、ニス、エナメル等の生産に當つてゐる。ケベックのブラウンス・ブツクはその名と共に非常に有名で、且つ廣く知られたつてゐる。トロントからはアンモニア、ハミルトン及びカバークリップからは酸類その他が生産される。肥料工場はハリファックス、ハミルトン及ニューウエストミンスターに存在してゐる。又、ケベックではタバコ用セロファンが生産されるようになった。カナダにおけるI・C・Iの活動の中でとくに注目すべきはニッケルである。International

Nickel Co. of Canada をめぐつてアメリカ資本(デュボン・モルガン)との間にはげしい闘争があつて後に、共同所有とする事で結末がついた。

つぎにアメリカにおける關係について一言しておこう。I・C・Iとアメリカ化学工業の支配者であるデュボンとの關係はきわめて密接であることは、すでにカナダあるいはアルゼンチンにおける提携を通じても明白である。I・C・Iの投資はゼネラルモーターズ、デュボン、アライド・ケミカルズの株式にたいしてなされており、ゼネラルモーターズの重役中にI・C・Iの會長が含まれていた。デュボンとの關係はさききのべた海外における活動の協同のみでなく、特許の交換、海外諸國にある代理機關の相互利用、その他市場についての諸協定をおこなつてゐる。又、一九二八年四月にはチエイス・ナショナル銀行はI・C・Iと共同の下に、“The Finance Company of Great Britain and America”を設立した。この會社の重役會にはI・C・I、チエイス・ナショナル銀行の代表の他に、ゼネラルモーターズ、ベツレ・ハム・スチール、メトロポリタン生保、American Locomotive、American Car and Foundry、American Railway Express その他のアメリカ大資本の代表者を含んでゐる。ロチエスターはこのさいに、チエイス・ナショナル銀行は一九三〇年以後はロツクフエラーが支配するようになったため、I・C・Iはロツクフエラーとも間接の關係をもつようになったという意味のことをのべてゐる。

(五)

以上においてI・C・Iの設立當初の概觀を一應スケッチした。同社の設立によつてイギリスの化学工業はこの大トラストの下に集中的に吸収されることゝなつたことは勿論である。それと同時に、世界の化学工業はI・G(ドイ

ツ) デュポン (アメリカ) I・C・I (イギリス) の三大獨占體によつて大部分が支配されることゝなつたことは明らかである。これらの三大資本は個々の分野において相互に對立をつゞけながらも、資本の共通の目的という大前提の下に立つてはきわめて緊密な連繫を保つてゐることは明白である。

そしていづれの場合においても同様のことが言えるのであるが、I・C・Iの例がしめすように、かくも廣汎な分野にわたる關係事業が一のコンバインの手に集中され、しかも、こうしたコンバインが、それが善かれ悪しかれ、労働者の心臓と結びつき、戦争という目的にたいする製造品と結びついている。ヴァイツカースやクルツプがさうであつたとくに、I・C・Iも正にこれらと同様の役割をもつてゐるということができる。